

令和元年6月10日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21028

研究課題名（和文）日本の障害者福祉における共創的表現に関する実証研究と理論構築

研究課題名（英文）Empirical research and theory construction about co-creative arts activities of people with disability in Japan

研究代表者

長津 結一郎 (Nagatsu, Yuichiro)

九州大学・芸術工学研究院・助教

研究者番号：00709751

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は障害者の表現活動のなかでも、作品として価値化されるものとは異なる、活動に關与するさまざまな立場の人たちとの關係性を踏まえて生まれている作品やその状況を「共創的表現」と名指し、障害者の表現活動に埋め込まれているもうひとつの価値について、理論と実践の往還を通じて理論構築していくことを目指したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害のある人の表現活動について近年国内で法整備が進み振興されている一方、研究的議論は遅れている。本研究では、障害のある人の表現活動について、テキストマイニングの手法を用いた現状調査とマッピング、現場ヒアリングなどを通じた理論構築を行うことを目指した。そのことで、表現活動を通じて生まれている人と人との關係性に着目し、単に芸術的な価値があるものとしてだけでなく、社会的価値や共同体的価値等についてを含めた多面的な価値を内包するものだとすることをまとめている。

研究成果の概要（英文）：This study considered art activities of people with disability. What this research focused on was not the value as a work, but the work and the situation that were created based on the relationship with people of various positions involved in the activity, and the author named this "co-creative art activities". This study aims to construct a theory through the return of theory and practice about another value embedded in the expression activities of people with disability.

研究分野：芸術社会学

キーワード：社会包摂 社会福祉学 障害 共創 芸術諸学 アール・ブリュット

1．研究開始当初の背景

昨今日本国内では、障害者の表現活動に関する議論が騒がしい。2020年東京オリンピック・パラリンピックに合わせて開催される文化プログラムに、障害者の表現活動を交えた活動を行うことが求められているなか、音楽・美術・演劇・ダンスなどさまざまな芸術分野で、障害者の表現活動が注目を集めている。また国や地方自治体の施策として障害者の表現活動を支援・発掘・展示していく動きも広がりつつあり、厚生労働省や東京都には専門の補助金・助成金制度が構築されつつある。

研究の立場から障害者の表現活動について振り返ってみると、おもに芸術療法的なアプローチが重要視されたり、福祉施設等での余暇活動の一環としての評価がなされてきた。文化経済学者の川井田祥子が執筆した『障害者の芸術表現』(2013)では、障害のある人の表現活動についての現在の様相を論じ、自立支援という目標に対してどのように表現行為の継続をはかってゆくのかについて実証的研究を試みている。ただ、美術批評家の榎木野衣が『アウトサイダー・アート入門』(2015)で指摘されているように、障害者の表現活動を通じて生まれた作品をどのように取り扱うかについては依然として議論が分かれたままである。そうしたなか、「純粋性」「呪術性」などといった用語とともに障害者の表現が取り上げられ画一的に価値化されることで、社会に対してある種のわかりやすさとともに当該分野の理解が広がっていくことについて、榎木は「和製アール・ブリュット」と称して、既存の社会に対して従順かつ従属的な立ち位置として障害者の表現について取り上げることに警鐘を鳴らしている。

一方、申請者のこれまでの研究では、表現活動の現場において、障害者と芸術家との間には、従来指摘されてきた“ともに協力し補完しあう”関係性としての「共同性」(岸中聡子『「障害者アート」と「共同性」』(2004))だけではなく“共に価値の転換を企てる”関係性としての「共犯性」が生起しており、芸術的価値ばかりではなく社会的な価値、さらにはコミュニティ形成に資する共同体的な価値をも生み出している点が明らかになっている。現場に目を向けると確かに、障害者の日常的な行為や、作品ができるまでのプロセス、福祉施設全体に流れる空気感など、作品そのものを媒介にして生まれている多様な関係性や状況について価値化して検討しようという動きが見られている。

だが、障害者の表現活動として、作品を見るのかプロセスを見るのか、もしくは才能を重視するのか「共犯性」を意識するのか、と考えると、圧倒的に後者についての言語化がなされていない。作品偏重主義と言わざるを得ないこの状況は、障害者という存在を芸術制度という権力性によって搾取・再配置化し、障害者の才能のあり/なしという線引きを強固にすることで、障害者の「他者化」を促進してしまうと主張する者もいる(知足美加子「障害者の他者性と芸術表現」)。

2．研究の目的

このような背景から本研究では、アール・ブリュットに代表されるような、障害者の表現活動のなかでも作品として価値化されるものとは異なる、活動に関与するさまざまな立場の人たちとの関係性を踏まえて生まれている作品やその状況を「共創的表現」と名指し、障害者の表現活動に埋め込まれているもうひとつの価値について、理論と実践の往還を通じて理論構築していくことを目指した。具体的には、(1)障害者の表現活動についての現状調査とマッピング(2)「共創的表現」についての現場ヒアリング(3)「共創的表現」に関する実証研究と理論構築を行うことを目的とした。このことは、障害者のみならず、多様な生きづらさと表現を考える上で、理論と実践の往還を通じた新しい視座を提供できると考えた。

3．研究の方法

(1)障害者の表現活動についての現状調査とマッピング

まず障害者の表現活動について、主にその支援が拡充した2000年以降の動きを中心として、新聞記事データベースや基礎文献をもとにした現状調査を試みる。障害者の表現活動がどのように取り上げられ定義づけられているのかという点をデータ化し、今後の研究の基礎材料とすることを旨とした。

(2)「共創的表現」についての現場ヒアリング

日本国内で障害者の表現活動の分野で「共創的表現」に取り組んでいると考えられる全国約の福祉施設や活動にヒアリング調査を実施した。単に作品を制作する環境を支援するだけでなく、障害当事者の周囲にいるさまざまな立場の人たちとの「共創」にフォーカスを当て、その歴史的経緯と関係性の有り様について明らかにしようとした。

(3)「共創的表現」に関する実証研究と理論構築

短期的なフィールドワークを通じ、「共創的表現」の現在の様相を浮き彫りにすることを目指した。これらの活動とはすでにネットワークを構築済みで基礎的な調査は終了している。そのうえで本研究では、協働の現場で何が起こり、どのようなプロセスで共創しているのか、またそれをどのように外部的な視点を持ちながら定義化していくかについて検討した。

4．研究成果

以下、年度ごとに研究の進捗と成果について述べてゆく。

平成 28 年度

今年度は文献・新聞調査や事例調査を実施した。文献・新聞調査においては、おもに障害者の表現活動について取り上げた 1991 年から 2015 年の新聞記事をリスト化し、テキストマイニングの処理を行う新聞記事内容分析を行ったことで、記事の傾向を分析した。結果、記事件数の増加に伴い「純粋性」や「オリジナリティ」を表す形容詞・形容動詞等があわせて増加していることがわかった。このことは、障害者の表現活動を社会に伝える際に「純粋言説」が用いられることで、「障害／健全」という境界線が動かないままに安直に理解してしまう危険性があることを示唆している。その対抗言説としてどのような表現を用いるべきかは量的調査では抽出し難かった。そのため今後の質的調査によるトライアングレーションの視座が必要であることがわかってきた。以上の研究成果は日本文化政策学会で発表した。

また事例調査においては、日本全国より 3 つの活動について注目し現状調査を実施した。福祉施設を運営する NPO 法人の事例では「表現未満」という言葉を用い、表現活動として一般に捉えられる以前に起こっているクリエイティビティに着目していた。ろう者による音楽活動とそれを取り上げた映画制作の活動では、ある立場によっては表現と捉えられているものが、異なる立場には表現と捉えられないという状況を生み出していた。身体障害者と高齢者による演劇活動では、異なる立場の人々による「共創」が、それぞれの持つディスアビリティを表現の場に昇華させるプロセスを見ることができた。これらの事例について特徴的な要素を抽出し次年度以降の研究につなげていくことができた。

平成 29 年度

本年度はフィールドワークとインタビュー調査による考察を行い、単著にてその成果の一部を発表した。フィールドワークにおいては、障害／健全のあり方について問いかける演劇作品を制作し、その作品の経緯をふくめ映画にまとめた「マイノリマジョリテ・トラベル」の上映会のフィールドワークを行なった（福井県、高知県、岡山県等）。これらの上映会での参与観察や、その後のアンケートの分析から、社会的包摂の近年の議論における障害者の処遇の問題（特に、社会包摂についてを単に包摂／排除の問題としてだけでなく、障害者の同一処遇／異別処遇の問題としても考える議論）と照らし合わせて検討を試みた。その結果において、障害／健全の境界線を揺るがす作品を見た鑑賞者の反応として、判断の保留という態度が見られたことが特徴的であった。この保留という態度こそが、人々をその後の新しい行動や活動に駆り立てる原動力になるものであると推察される。これらの成果は日本文化政策学会、共創学会において学会発表を行なった。

インタビュー調査においては、以前よりフィールド先にしてきた義足のダンサーへのインタビュー調査を行なった。東京 2020 オリンピックに向けて障害者芸術が全国的な振興を見せているなかで、研究代表者はこれまでの研究的見地から、障害者やその表現を消費的に扱う状況にあると考え、全国的に活躍するダンサーへのインタビューをもとに当事者からの視点を考察することを試みた。これらの成果は、単著「舞台の上の障害者：境界から生まれる表現」に補章としてまとめた。

平成 30 年度

今年度はフィールドワークを行いつつ、最終年度として成果をまとめることを意識し活動を行なった。フィールドワークとしては、初年度より調査を行ってきた福島県猪苗代町にある「はじまりの美術館」についてのフィールドワークとインタビューを行なった。社会福祉法人が運営している美術館であるが、単に障害者芸術を支援するという場ではなく、美術館という場自体が多様な関わりを生み出すことができる媒体になっている側面を指摘することができた。本調査については、編集作業中のため業績には記載していないが、現在出版準備中の共著本で成果発表予定（採録決定）である。また今年度から、宮崎県都城市の都城市総合文化ホールで開催されているダンスワークショップに対する調査も実施した。昨今の障害者芸術をめぐる法整備を背景として、地方の公立文化施設という場において、いかに障害のある人が芸術表現を行う場を創出することができるかという点を問題意識とし、関係者にインタビューを行なって分析を試みた。本調査については、編集作業中のため業績には記載していないが、現在出版準備中の共著本で成果発表予定（採録決定）である。また前年度より引き続き、新聞による内容分析について、日本社会福祉学会九州地域部会で成果を発表した。そのほか、障害のある人の表現についてのこれまで収集したデータをもとに映像やテキスト分析を行い、共創学会で発表を行なったほか、資料収集を行なった。

またこれまでの研究業績が国の機関に注目され、文化庁や厚生労働省での障害者芸術に関する政策提言に参与した。それらの経験から得た知見を招待論文でまとめた。

これらの成果を総合し、障害のある人をめぐる共創的表現のあり方についての理論構築を一步前に進めることができたといえる。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

長津結一郎、障害者による文化芸術活動の推進に関する法律及び基本計画の策定過程，文化政策研究、査読無、12 号、2019

長津結一郎、境界線を問い、向き合うこと：表現の現場の景色と往還しながら考えたこと、支援、査読無、9号、2019

長津結一郎、芸術と社会包摂に関するこれからの文化政策の課題：障害者による文化芸術活動の推進に関する法律を手がかりに、文化経済学、査読無、16巻1号、2019、42-44

長津結一郎、障害のある人の表現活動における「関係性」をめぐる議論、地域ケアリング、査読無、20巻12号、2018、96-98

長津結一郎、中山博晶、松井志穂、演劇ワークショップの社会包摂的側面への期待とその実際：特別支援学級における演劇ワークショップを事例に、芸術工学研究、査読有、29号、2018、21-31

長津結一郎、アール・ブリュットの先へ：「社会包摂」を手がかりに、芸術批評誌リア、査読無、38巻、30-34

〔学会発表〕(計13件)

長津結一郎、中山博晶、藤原健司、障害のある人が関わる身体表現におけるファシリテーションの実際：福岡県立ももち文化センターにおける身体表現ワークショップを事例に、日本アートマネジメント学会九州部会・文化経済学会<日本>九州部会連携による研究発表会、2019

長津結一郎、演劇ワークショップにおける相互行為分析を通じた「障害ノ健常」の共創プロセスの検討、共創学会、2018

中村美亜、三宅博子、長津結一郎、共創する音とからだ - ソワソワ、つんつん、共創学会、2018

小島立、中村美亜、長津結一郎、友岡邦之、吉田隆之、阪本崇、古池嘉和、宮崎刀史紀、小泉元宏、須田英一、川井田祥子、鬼木和浩、未来の社会デザインと文化政策の役割、日本文化政策学会、2018

長津結一郎、近年の障害者芸術の政策動向：厚生労働省の施策を事例として、日本文化政策学会、2018

長津結一郎、音楽と社会の関わりの現在的諸相、日本音響学会、2018

長津結一郎、アートと社会包摂の現場で起こっていること～映像分析を通じた予備的考察、日本アートマネジメント学会九州部会・文化経済学会<日本>九州部会連携による研究発表会、2018

長津結一郎、循環する共創の場：マイノリティ/マジョリティをめぐる映画上映の場についての考察、共創学会、2017

伊藤裕夫、鬼木和浩、川井田祥子、小島立、中川幾郎、長津結一郎、中村美帆、馬場憲一、吉本光宏、小林真理、公開ラウンド・テーブル「文化法制について考える」、日本文化政策学会、2017

長津結一郎、芸術と社会包摂をめぐる受容に関する一考察：映画『記憶との対話～マイノリティ・トラベル、10年目の検証～』上映会をめぐって、日本文化政策学会、2017

長津結一郎、中村美帆、久保田翠、山森達也、吉本光宏、再考・ソーシャルインクルージョン：表現しないとダメなんですか？、日本文化政策学会、2017

長津結一郎、障害とアートに関する言説の変容とその社会的背景：新聞内容分析を通じた考察、日本文化政策学会、2017

長津結一郎、芸術分野における「社会(的)包摂」に関する状況整理とその再検討、文化経済学会 日本、2016

〔図書〕(計2件)

長津結一郎、九州大学出版会、舞台の上の障害者：境界から生まれる表現、2018

服部正、山下完和、福森伸、岡部太郎、沼田里衣、長津結一郎、早川弘志、神谷梢、三栖香織、柊伸江、森下静香、中村政人、田端一恵、金武啓子、前山裕司、川井田祥子、白岩高子、明子アルガマ、安部由里子、あいり出版、障がいのある人の創作活動実践の現場から、2016、

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。